

<書評>

## 《泰国华语特有词语例释》

北川修一

### 一、背景

華語の日本でもっとも一般的な呼称は中国語であるが、この中国語を中国の共通語とするならば、中国大陸と必ずしも背景に持つ文化を同じくしない地域の華語としては（中国大陸においてもそれぞれの地域に地域標準語が存在するが）、まず台湾地域の華語が挙げられるであろう。これに次いで、シンガポール、マレーシアの華語（星馬華語）も、それによって創作される馬華文学によってその存在が知られている。一方、同じく東南アジアにあって、最多の華僑、華人を有する（土着の民族に対する比率ではない）国の1つである泰国における華語については必ずしもその存在や現状が広く知られているとはいえない<sup>1)</sup>。

しかし1998年にはアモイの鷺江出版社から東南亜華文文学大系の泰国巻として、泰華文学（泰国における華語文学）の代表的な作家司馬攻はじめ10人の文集10巻がそれぞれ出版され、2000年には、泰国国内においても泰華文学出版社から泰華作協千禧年文叢として、一冊一冊は100頁足らずの小冊子といえるものではあるが、32人全32冊のシリーズを出版している。またこれまでに1980年代には《泰華文學》《湄南河文藝》など華語定期刊行物の発行が試みられたこともあったし、現在でも《泰華文學》が1999年7月から隔月刊として発行されており、既に10年を越えた。また華語新聞は《星暹日報》、《亞洲日報》、《世界日報》、《京華中原》、《中華日報》、《新中原報》などが発行されており、更に華語書籍の出版社には、1990年以降出版を行っているところで、泰華文化出版社、八音出版社、留中大学出版社など数社挙げられる。隔月間の《泰華文學》は発行と同時にインターネットで公開されており、上記出版物も発行部数が100単位であることを考えれば、営利として成立していないと言わざるを得ないが、いずれにしても華語の出版物は活発に送り出されている<sup>2)</sup>。

このような泰国の華語を読む場合、まず第一にぶつかるのが言葉の問題である。中国はじめそのほかの地域で行われるのと異なった語彙に出会った場合、頼るべき工具書がなく、これまではより多くの文献に当たり一つ一つ蓄積していくよりほかになかった。《泰国华语特有词语例释》（以下《泰国华语》と略称）は、泰国の華語文献の理解に対する障壁を一つ取り除いてくれるものであるといえる。

また東南アジア地域において、シンガポールの華語については既に汪惠迪編著（1999）があるが、同書の編者汪惠迪氏は、汪惠迪（2004）において、中国大陸の「普通話」のみならず、世界各地、特にアジアに分布する華語全体を対象として《全球华语地区词典》を構想しており、《泰国华语》も同書前書きによれば、この構想に向けた研究の一部であったという。その後、本書評を執筆中の2010年5月に《全球华语词典》として出版された消息を知り、拙稿の投稿締

め切りの迫った10月中旬に入手することができた。

## 二、著者、出版社、本書の構成

著者は多くの中国の高等教育機関で教育に従事した後、2007年出版当時は泰国、バンコクの郊外にある華僑崇聖大学中文系客座教授(2007年執筆当時)である徐復嶺氏で、これまでに《〈醒是姻缘传〉作者与语言论考》《现代汉语常用虚词词典》などの研究があるが、華語学習者の一人として、また漢語史、近代漢語にも興味を持つ評者にも馴染みが深い。

出版社は泰国、バンコクの華語書籍を専門に出版する留中大学出版社(“留中”は中国留学の意味)であるが、恐らく出版社としての歴史は浅く、吳佳怡(2008a、2008b)の目録、評者の手元にある同社出版の書籍を見ても、ここ数年のうちに創設されたものと見られる。

本書は大きく、辞書的に語彙を集め、例文解釈を付した辞書部分と付録に分けられ(1頁から238頁まで。以下辞書部分と略称)、付録には、一として〈泰国各府及主要旅游城市中泰名称对照表〉(239頁から242頁まで)、二として〈主要收词、引例书目及简称〉(243頁から250頁まで)、三として同氏の泰国華語研究論文〈泰国华语和大陆普通话的差异〉(251頁から271頁まで。以下付録論文と略称)が載せられている<sup>3)</sup>。本書評では主に《泰国华语》辞書部分を対象にし、付録論文については次節で語彙の分類について言及するのみで、泰国の華語教育などについては言及しない。

## 三、収録語彙の特徴

同書の辞書部分を通読した際、非常に残念に感じたのが、大多数の語彙については、その語の源が記されていないことである。ただし付録論文では「1. 新造词和新生义」「2. 古语词和旧词语」「3. 方言词语」「4. 外来词」「5. 与佛教和神祇有关的词语」等、分類がされているところを見ると意味的な解釈にポイントを置いたため、必ずしもそれらの点に留意していなかったわけではないのであろう。まず付録論文でなされている上記の4つの分類について見ておく。但し語彙は必ずしも付録論文からではなく、一部辞書部分から用いたものもある。

「1. 新造词和新生义」は泰国の文化的な背景によって生まれた語彙や意味で、たとえば“猴子学校”<sup>4)</sup> (โรงเรียนฝึกสอนลิง<sup>5)</sup>、《泰国华语》では椰子取りのための猿を訓練するところと解するが、更に見世物として猿回しのような活動をするところもある。)“水灯节”(วันลอยกระทง、ロイクラトーンというタイの伝統的な祭り)などの語彙を指す。

「2. 古语词和旧词语」で挙げられる古語詞のうち古代漢語として挙げられる“面”“目”“行”“食”“晤”など、近代漢語として挙げられる“阿舍”“大舍”“舍奶”“舍仔”“红毛”などは、もちろん使用者によって古代漢語、近代漢語と認識していた可能性が皆無とは言い切れないが、上記のうち、恐らく“晤”が書面語として用いられていると思われるほか、ほとんどが潮州語語彙(潮州語を表記するために用いられた訓読字も含む)であり、むしろ「3. 方言词语」に含めるべきものかと思われる。また旧詞語として挙げられる、“车夫”“邮差”“车马费”“维他命”“米突”のうち“米突”(メートル)以外は、台湾など自由主義経済圏では多用されているものであり、これも多くは「3. 方言词语」に帰すべきかと思われる。

「3. 方言词语」では潮汕方言(本書評では潮州語と呼称する)を始めとして、その他、客家、閩、雲南などの方言、次に香港、台湾地域の語彙、またマレーシア華語の語彙に分けて言及し

ている。このうち、香港、台湾地域の語彙については、自由主義経済圏で行われる華語は共通する点が多いのは言うまでもないが、ただ《泰国华语》においては、やや注意すべき点がある。詳細は次の「四、注意点（二）泰国華語」で述べる。

「4. 外来詞」では主に英語、タイ語からの外来語について述べる。《泰国华语》辞書部分には日本語からの語彙も若干挙げられている。日本語からの語彙には“多要打”（トヨタ）、“野马哈”（ヤマハ）、“味之素”（味の素）、“便当”（弁当）、一级棒（いちばん、最もすばらしい）などがあるが、最後の2つは台湾を通して渡った言葉であろう。

「5. 与佛教和神祇有关的词语」では、国王が泰国仏教の最高の護持者であり、国民の多数が仏教信者であるため、言葉にも大きく反映し、泰国仏教に関する多くの語彙を取り上げている。

次に本書評では、必ずしも上記の分類にはよらず、（一）泰国の生活、（二）泰国華人の生活に分けて同書に挙げられた泰国華語を一瞥する。語釈は《泰国华语》を簡易に日本語に訳して紹介するが、固有名詞などの場合は、日本で一般的に用いられている名称であてた部分もある。

#### （一）泰国の生活

ここには、泰国の日常生活、宗教文化を示す語彙や泰語からの音訳借用語や意識されていないが、泰国の生活文化がうかがい知れる語彙を挙げる。“阿曼”（“阿芒”、“唉曼”とも書く。恐らく**อาบัง** の音訳）インド人、中でもガードマンなどの仕事に携わるものを指すことが多いという。“唉曼”でも例文として挙げられているが、泰華文学の代表的な作家の一人、黎毅氏の〈魯哈多和他的老牛〉<sup>6)</sup>は、泰族ではない華人作家が、更に少数派のインド人を主人公として描いた作品として興味深い。またインド人は“曲仔”“曲仔鬼”（恐らく**แก๊ง** を潮州音で“曲”と表記し、更に潮州語の接尾辞“仔”を付けたもの。更に“鬼”を持つ例があるのは、この語がやや差別的な意味合いを持って使われることもあるからである）とも言われるようである。

“妈妈面”（**มาม่า**）はもっとも知名度の高い即席麺であり、“鱼露”は日本でも名はよく聞かれるナンプラー（**น้ำปลา**）、“冬央公”“冬养貢”“冬荫功”は世界三大スープの一つといわれるトムヤムクン（**ต้มยำกุ้ง**）、“嘟嘟”（“嘟嘟车”“突突”）は日本の泰国旅行のガイドブックでも紹介される三輪車タクシーのトゥクトゥク（**รถตุ๊กตุ๊ก**）である。週末にはマーケットも開かれ観光地にもなっているチャトチャック（**จตุจักร**）は“乍都节”と書かれるが、これは潮州音による音訳である。或いは前掲の“突突”も潮州音により末子音を表記したものかもしれない。また、泰国の基本通貨バーツ（**บาท**）を華語では“銖”とい、《泰国华语》にも収録されているが、これは当初、恐らくやはり潮州系華人がその音により、「末」と表記していたが、それに金偏が加えられ、その後、もともとそのような漢字はなかったため、字形の近い“銖”にとって変わられたものである<sup>7)</sup>。このような背景は《泰国华语》編纂の主旨とはことなるため、述べらておらずとも当然ではあるが、もし記述があれば、内容が豊富になったであろう。また呼称（それに用いられる職業を表す名詞も含む）というのは、人と人の関係を直接表す語であり、他の語に意味的に訳すとその語感を表しにくいいため借用語として取り入れられやすいが、“阿曾”“阿占”“亚曾”（**อาจารย์**、以上ともに先生を意味する）、

“盞抱” (หลวงพ่อ、年齢の高い和尚さん)、“盞丕” (หลวงพี่、仏弟子、敬意を込めて行う呼称)、“坤摩” “坤慕” (คุณหมอ、以上ともに医者、前者は華語音、後者は潮州音によるか)、“坤乃” “坤奶” (คุณหมอ、以上ともに年齢のいった奥様) “坤仁” (คุณหญิง、叙勲などを受け地位のある女性) “坤耶” (คุณยาย、おばあさん) 等がタイ語から音訳借用語として取り入れられている。また華人、華僑と現地の泰族との混血は、特にマレーシアに近接する地域でマレーシアの呼称にならい“巴巴仔”と呼ぶようである。

次に宗教関係の語彙を見る。インドのラーマヤナに源を持つタイの抒情詩、ラーマキエンは“拉玛坚” “罗摩坚” (รามเกียรติ์)、その主人公ハヌマーンは“哈努曼” (หนุมาน) と書かれる。日常の宗教活動、行事には、日本では入安居と言われる“守夏节” (วันเข้าพรรษา)、出安居と言われる“解夏节”、“出夏节” (วันออกพรรษา) がある。その他、祭日としては“佛诞节” (วันวิสาขบูชา、日本では灌仏会、また一般的にはお花祭りなどと言うこともある) など上座部仏教、大乘仏教を問わず広く行われる活動もある。また、日本語では音訳でタンブンと言われるが、もと徳を積む意味で、派生して喜捨、布施を表す言葉は“添汶”

(ทำบุญ)、同じく音訳でワットとされる寺院は“越” “越寺” (วัด) とされるが、潮州音による音訳である(後者は音訳に更に意識の“寺”を加えている)。また華語音で“瓦”とも書かれることもある

## (2) 泰国華人の生活

泰国華人の生活を窺い知れる語彙も少なくないが、ここでは大別して、潮州語の呼称(身分を表す語も含む)、潮州華僑の特徴的な語彙、宗教関係の語彙を挙げる<sup>8)</sup>。呼称には“家翁”(舅)、“座山” “座主”(金持ち、資産家)などがあり、この他“阿”で始まる呼称、“阿舍”(坊ちゃん、御曹司)、“阿头家”(店の主人、ボス)など、他の地域の閩南語と共通するものが多い。潮州華僑に関する語彙としては“侨” “唐”を持つ言葉が見られるのは比較的一般的であるので省略する。“番” “番古” “番客” “番婆” “番仔” “过番” “过番客” “老番古”などの“番”は外国を表す言葉であるが、泰国華語の中では一般的にはタイ人を表す。“番批” “回批” “寄批” “家批” “批” “批馆” “批局” “批银” “侨批”の“批”は他の地域の閩南語でも同じであるが手紙を表す。ただ泰国華僑にとってこの“批”は、故郷の潮州に残る家族に消息を知らせ、また送金をも意味した。またどのような“批馆”から送金するかはどのような人間関係を持つかにも関係し、更に送金を頼む際は代筆を頼むこともあり、かなり個人的なことも把握していたようである。泰国の華僑、華人社会を知るには不可欠なものであり、上記のように“批”に関する語彙を9つも挙げるのであれば、同書の目的ではなかったといえども、やや詳細な文化的な背景の記述があってもよかつたのではなかっただろうか<sup>9)</sup>。

この他“歌册”は《泰国华语》で「歌本」と解するのみであるが、これは福建、台湾とも共通する閩南語の地域で盛んであった伝統的な演劇「歌仔戲」の読み物用の小冊子をも指し、潮州の伝統文化として非常に重要なものである。「潮劇」(潮州劇)は現代でも“酬神戏” “谢神戏”(神に感謝を表す劇)としてやその他祭り、催しの際には演じられ、また泰語で行われる場合もある。

次に宗教文化を見てみたい。中国各地の民間の信仰対象として、台湾の「土地公」(地元の

神様)に相当するような“本头公”(《泰国华语》によれば、もと“本土公”であるという“本头妈”がある(他に“地主爷”“昭帝爷”もある)。この他、中国各地からもたらされた神としてそれぞれ“天后圣母”(福建、広東等中国東南沿岸地域の媽祖)、“水尾圣娘”(海南島の海を司る女神)、“七圣母”(潮州華僑、個人の媽祖に対する尊称)が挙げられているが、この他にも泰国には福建系の「清水祖師」(宋代の僧侶)、潮州系の「大峰祖師」(宋代の僧侶)<sup>10)</sup>、「林姑娘(林府姑娘)」(宋代の海賊、林道乾の妹)<sup>11)</sup>などがあり、挙げられるべきであろう。このうち「大峰祖師」は泰国華僑、華人の多数派である潮州系の信仰対象であり、“善堂”(民間の慈善事業を営む機関)の一つである「報徳善堂」ではこれを祀っている。「林姑娘(林老姑娘)」は中国出身ではあるが東南アジア華人社会において神格化されたもので、その出身とともに非常に興味深い。

以上、若干の補足をしながら《泰国华语》に収録される泰国独自の文化、或いは泰国華僑、華人の文化を表す語を一瞥したが、これらは当然ごく一部であり、《泰国华语》には更に多くの語彙が収録されている。即席麵、交通手段などから宗教文化にまで、非常に広範囲で多様な語彙を収めていることは見て取れるであろう。また《全球华语词典》には、おそらく同書が各地域で共通する内容の項目を中心に行っているため、泰国の独自の文化を表す上記のような語は収録されていない。《泰国华语》が《全球华语词典》の編纂を目指して作られたものであるとしても、これらの語彙が豊富に収録されていることから、《全球华语词典》の出版後も《泰国华语》の存在価値は尚別に高く存在するといえる。

#### 四. 注意点

本節で述べる注意点は後にも言及するように必ずしも本書の価値を減ずるものではないが、使用する際の注意点として述べておく。

##### (1) 華語であるか

英語で言うchinese languageを表わす言葉は多く、またそれらが用いられる地域や、表わす意味や範囲は全く同じではない。またそれをを用いる人によっても異なる。「華語」の他、例えば、「漢語」「中国話」「国語」「中文」「官話」などある。今、一々これらの差異について述べることはできないが、「華語」という言葉は嘗ては主に東南アジアで用いられることが多かったが、その後、昨今の世界的な「中国語ブーム」とともに、対外向けの「華語」教育を言う場合に、「華語」という言葉が「漢語」とともに一般的に用いられるようになったようである。そのような背景もあって、例えば「漢語」がもともと漢民族の言葉という意味で、標準語から方言まで、古代から現代までを含む概念であるのに対して、「華語」は主に現代の標準語を指すことが多い<sup>12)</sup>。もちろん観念の中における標準語であり、それがもともと東南アジアで用いられたこともあり、地域的な特色を排除するものではない。本書は“华语”を書名に冠するが、必ずしも上記のような標準語としての華語であるとは限らない語彙、すなわち泰国の華人の多数派である潮州人の潮州語が注記なく収録されている。もちろん潮州語起源の語彙であっても、泰国華語に溶け込み、華語として用いられている語彙もあるが、小説など文学作品の中で、明らかに潮州語を漢字で表記したにすぎないと思われる会話、或いは特に潮州語的な色彩を強めるために用いられたような例も見られる。前の「(2) 泰国華人の生活」で見た幾つかの語もその可能性もあり、また“乜”(何)、“呷”(話す)“睇”(見る)などがあ

るが、これらをそのまま華語音で読み華語として使われたか疑問が残る。

但し華語という基準を守るためにこれらを排除することは、一方では既に泰国華語に溶け込んでいる語彙もあるため、技術的に区別が困難であり、またそれは、我々が同書をたよりに泰国華語文献を読む際には却ってマイナスになってしまうことであり、決して欠点ではない。

## (2) 泰国華語であるか

同書には泰国で出版される華語紙の一つ《世界日報》やそのウェブ版から非常に多くの用例が取られている。洪林(2000:232)によればこの《世界日報》社は創刊当初から台湾商人との合弁により始まっており、90年代以降は、やはり台湾の《聯合報》によって受け継がれているという。

評者は在泰時に何日分かの《世界日報》を読んだが、例えば子ども向けの欄には、泰国の華人の子弟の投稿とともに、台湾の小学生の作文が載せられていたり、注音字母を添えた初等読み物が掲載されていたりしていた。恐らく台湾の《聯合報》と記事を共有している(或いは聯合報の記事を《世界日報》でも使っている)部分も少なくないのではないかと思われる。また台湾出身の記者の手になる記事も含まれるであろう。実際、挙げられた語彙も台湾華語と共通するものが相当数に上り、泰国華語としてどの程度定着しているものかは疑問が残る。

ただしこのことも、前の(1)で述べた点と同じく、同書の欠点とは言えない。もともと泰国華語は一定量見られるといっても、シンガポールのように華人が多数を占め、テレビには華語チャンネルもあり(泰国では華語放送局の開設を目指す動きもあるようであるが、実現されていない)、華語新聞も町中あちこちで買えるというわけではないため、泰国における華語コミュニティの把握はシンガポールのように容易ではなく、それぞれの華語コミュニティの間にも必ず何らかの接点があるとは限らないのが現状であり、「全体的に」定着している語彙というのも認定が難しい。

また、これが辞書的な工具書である以上は、当然あまり定着はしておらず稀にしか出現しない語彙でも載せられるべきであろうし、今後《世界日報》によって普及する用語もあるであろう。そして何よりも、《聯合報》がそのまま一定量泰国に輸入され流通しているだけであれば、これを用例として採用することには問題があるとする意見もあるかもしれないが、《世界日報》は泰国のメディアとして流通しているものであるから、語彙採録の範囲に新聞を含めた以上は当然の結果であるといえる。

上記「華語であるか」「泰国華語であるか」の2点は、決して《泰国华语》の欠点ではないが、使用する際に、留意する必要がある場合もあろう。

## 五. まとめ

先にも述べたように、本書評執筆中の2010年5月に、予定されていた《全球华语词典》が出版されたが、同書の編集方針によってであろう、泰国の文化を反映した語彙は収録されていない。《泰国华语》が《全球华语词典》の準備のための役割を持つものであったとしても、真髄ともいえる泰国の文化を反映した語彙は《泰国华语》にのみ収められている。評者も若干補足させていただいたが、同書によりはじめて知りえた語も数え切れない。「三、収録語彙の特徴」でも見たように、即席麺から宗教文化まで収録範囲は幅広く、実は写真などを添え、説明をやや詳細にし、それぞれの語彙にその語源などを記せば、「辞典」として語彙をひくだけではな

く、「事典」としても読みうるものである。泰国の華語文献の読者として、《泰国华语》の出版を喜びたい。

(きたがわしゅういち 東海大学日本語文学系)

注

- 1) ただし、泰国における華語教育の歴史、現状、将来への展望について述べた研究はここ10年に限っても20編以上あり、また日本語で概要を知りうるものに玉置充子(2007)がある。
- 2) 前記1980年代に出版された同名の《泰華文學》とは別の刊行物である。発行当初は繁体字であったが、現在は簡体字で刊行されている。またこの他、泰国華人による華語出版物(主に文学を中心とし、必ずしも泰国国内で出版されたものではない)を集めた目録は既に幾つか存在する。本学図書館館報に掲載された徐佳怡(2008a, b)もその中で、もっとも詳細である。また特に文学史については洪林(2008)が詳しい。
- 3) 同書は語彙部分については徐復嶺(2006)が元になっている。語法については後、徐復嶺(2009)も発表されている。
- 4) 以下、《泰国華語》に収録される語彙は“ ”で括り表示する。
- 5) 《泰国華語》では借用語の元の言語は記載されていないが、泰語については参考のため分かるものについては記載しておく。
- 6) 初出は不明だが、黎毅(1993: 137)によれば、作品の末尾に1961年と記載されている。黎毅(1998)にも収録されている。
- 7) 筆者は泰国の多くの中国寺院で、壁に刻まれた募金者リストに“銖”とともに金偏に末と表記された文字を見た。またバンコク郊外のアンシラーにある「紅杏本頭老公公」では石碑(道光庚戌年衆弟子

誠心喜題銀両者開列と題されている。ちなみに、道光庚戌年は西暦1850年。)のリストに“末”と表記された例も目にした。

8) 嘗て評者は北川修一(2003)において、初期の泰華文学の代表作の一つ《三聘姑娘》の潮州語について述べたことがある。

9) 泰国で洪林、黎道綱主編(2006)が出版され、「僑批文化」について詳しく知ることができる。

10) 泰国の中国寺院では結縁品として『大峰祖師救苦保運家門平安經』が配布されているが、これには泰文字により、潮州音で注音されたものもある。泰国の中国寺院の結縁品については改めて紹介したい

11) 筆者はバンコク出身の華人の友人から、「財源廣進」「大吉大利」という文字とその間に「林姑娘」の像がかたどられたお守りをいただいたことがある。

12) 「華語」について、その起源や使用状況、定義について述べた研究に郭熙(2004)がある。

#### 参考文献

郭熙2004〈论“华语”〉《暨南大学华文学  
院学报》2004年第2期, 56-65, 广州,  
暨南大学出版社

洪林2000〈泰國華文報簡史〉《泰華文化  
人物辭典》225-236, 曼谷, 泰中學會

洪林、黎道綱主編2006《泰國僑批文化》  
曼谷, 泰中學會

洪林2008《泰国华文文学史探》汕头, 汕  
头大学出版社

黎毅1993《黎毅短篇小說集》曼谷, 八音  
出版社

黎毅1998《黎毅文集》(东南亚华文文学  
大系·泰国卷) 厦門, 鹭江出版社

李宇明主編2010《全球华语词典》北京,



商务印书馆

徐復嶺2006〈泰國華語同普通話的詞匯差異〉

《語文建設通訊》第88期，香港，香港中

國語文學會

徐復嶺2009〈泰國華語語法變異例說〉《語文

建設通訊》第91期，香港，香港中國語文學

會

汪惠迪編着1999《时代新加坡特有词语

词典》新加坡，联邦出版社

汪惠迪編纂2004《全球华语地区词词典》的构

想》新加坡，国家疆界与文化图像国际学

术会议论文 ([http://www.huayuqiao.](http://www.huayuqiao.org/articles/wanghuidi/wang05.htm)

[org/articles/wanghuidi/wang05.](http://www.huayuqiao.org/articles/wanghuidi/wang05.htm)

htm)

吳佳怡2008a〈泰國華文文學文學類目·甲編〉

《東海大學圖書館館訊》新79期，42-59，

台中，東海大學圖書館

吳佳怡2008b〈泰國華文文學文學類目·乙編〉

《東海大學圖書館館訊》新80期，33-46，

台中，東海大學圖書館

北川修一2003「泰華小説《三聘姑娘》の潮州

語」『中国語学研究 開篇』22，291-302，

東京，好文出版

玉置充子2007「タイ華人と中国語教育」『海外

事情』55(9)，48-62，東京，拓殖大学海外

事情研究所